

未来遺産運動と雑司が谷

川上千春

■はじめに

日本ユネスコ協会連盟の川上と申します。まず公益社団法人の日本ユネスコ協会連盟とは何か、なぜ私たちが未来遺産運動を行っているのか、未来遺産運動がめざすこと、他のプロジェクトではどのような活動があるのか、そして『雑司が谷がや』プロジェクト』に対する期待について、お話ししたいと思っています。

一九四五年に発足したユネスコは、「国際連合教育科学文化機関」——国際連合の専門機関です。本部はパリにあります。ユネスコの目的は、第二次世界大戦の悲劇をくり返さないよう、世界の国々で教育・科学・文化（後にコミュニケーションもついたので）協力と交流を通じて国際平和と人類の福祉を促進することにあります。

国際連合教育科学文化機関憲章（以下「ユネスコ憲章」と略記）の前文では、次のようなことが謳われています。

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。

相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信の為に、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。

ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代りに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。

（中略）

政府の政治的及び経済的取極のみに基づく平和は、世界の諸人民の、一致した、しかも永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって、平和は、失われないために、人

類の知的及び精神的連帯の上に築かれなければならない。

（「ユネスコ憲章」前文）

このように、ユネスコは戦争を「人の心」と結びつけて考えています。国連の専門機関の中で、人の心のことに触れている機関は数少ないと思います。また国連機関であるユネスコは政府間機関ですが、その憲章であるにも関わらず、「政府の取極のみに基づく平和は永続しない」と言いきっていることには、着目すべきでしょう。ユネスコは、昨年七十周年を迎えました。本来であれば「平和な世界になったので、ユネスコはもう必要なくなりました」という世界になってほしいのですが、残念なことに、世界中でいまだに悲惨な戦争や紛争が日々起きており、ユネスコ憲章に書かれていることがいまだに達成されていないのが現実です。

それでは、日本はいつ、ユネスコの加盟国になったのでしょうか。戦後、日本は平和国家として生まれ変わり、ユネスコ加盟をめぐると、一九四七年（昭和二十二）に仙台のユネスコ協力会が市民によりつくられ、官民一体となってユネスコ加盟運動が起きました。これが、私たち、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の誕生につながったわけですが、立ち上げ当初から一般市民が深く関わっており、とりわけユネスコ憲章に感銘をうけた大学の先生方が多かったと聞いています。

一九四七年十一月二十七日に開催された、第一回のユネスコ運動全国大会では、石川達三さん、新居格さん、仁科芳雄さんといった錚々たる方々が講演をされました。こうした運動が功を奏し、一九五一年（昭和二十六）に、専門機関のひとつであるユネスコの六十番目の加盟国として迎え入れられました。国連の加盟国になるのは一九五六年（昭和三十）ですから、サンフランシスコ講和条約締結の前にユネスコの加盟国になったわけです。

当初の目的であったユネスコへの加盟を果たした後も、私どもはNGOとして活動をしています。歴代会長もすべて民間出身です。ユネスコ憲章の理念に基づき活動をグローバルな視点から地域で進めようということと、としまユネスコ協会をはじめ、いま全国に二百八十六のユネスコ協会があります。連盟全体としては青少年育成に関する活動、途上国における教育支援活動、世界寺子屋運動と呼んでいます。それから世界遺産、地域遺産に関する活動、東日本大震災、熊本地震など被災地における教育支援活動などを柱に活動しています。

■日本ユネスコ協会連盟と未来遺産運動

それでは、日本ユネスコ協会連盟が、なぜ未来遺産運動をはじめたのか。ユネスコというと、みなさんは世界遺産を思い浮かべられると思います。一九七二年に、ユネスコの総会で採択された国際条約——世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約

(以下「世界遺産条約」と略記)に基づいて、条約を批准した国が、それぞれの国にある物件を世界遺産委員会に推薦します。日本にも世界遺産が二十ほどありますが、私たちが思ったのは「世界遺産だけが特別なのだろうか——たしかに世界遺産は世界の宝だけでも、国内の各地域にもたくさん宝があるのではないか」ということでした。

そこで十五年ほど前、「未来へひきつぐ地球のたからもの——世界遺産も！身近なものも！」という独自のロゴマークをつくり、活動を展開しました。私たちの活動の根拠となったのは、世界遺産条約の第十二条です。

文化遺産又は自然遺産を構成する物件が前条の2及び4に規定する一覽表のいずれにも記載されなかったという事実
は、いかなる場合においても、これらの一覽表に記載される
ことよって生ずる効果は別として、それ以外の点について
顕著な普遍的価値を有しないという意味に解されない。

条約の条文なので、一読しただけでは意味がわかりにくいのですが、要するに「世界遺産リストに掲載されないからといって、顕著な普遍的価値を有しないことを意味するわけではない」と言っているわけです。

そこで私たちは、もっと具体的な活動の展開をめざし、二〇〇

九年四月に「未来遺産運動」を立ち上げました。目的は、百年後の子どもたちに長い歴史と伝統のもとで豊かに培われてきた地域の有形・無形の文化や自然を守り伝える人たちを応援することです。未来遺産運動の発足当初は、毎年十件ずつプロジェクトを選んでいました。しかし、二〇一四年からは、数にかかわらず、メッセージ性はもちろん、日本国内の他のモデルになりうるかどうか、実現可能性や持続可能性があるか、そして広く開かれていくプロジェクトかといった観点から選考いたしております。

■プロジェクト未来遺産

こうした中で、二〇一四年には『雑司が谷がや』プロジェクトと歴史と文化のまちづくりがプロジェクト未来遺産に選ばれました。本日は、雑司が谷以外の地域のプロジェクト未来遺産についても紹介したいと思います。

たとえば、二〇〇九年に選ばれた、沖縄県うるま市の「現代版組踊「肝高の阿麻和利」とキムタカのまちづくり」があります。現代音楽とダンスを取り入れて、勝連城十代目城主「阿麻和利」の半生を描いた舞台を手掛けています。子どもたちの居場所づくり、ふるさと再発見、大人と子どもが参画する地域おこしを目的に一九九九年(平成十二)に企画されましたうるま市の勝連城界隈は、子どもたちが荒れていた時期があったそうです。そこで、子どもたち自身が地域の歴史や文化に誇りを持ち、未来に向かっ

て活動していけるようにできないかということで、現代組踊のグループが結成されました。当初は七人くらいしか集まらなかった中高生が、公開練習をしていくうちに百五十人に増えました。

二〇〇三年には関東公演、二〇〇五年に沖縄国立劇場公演、二〇〇八年にはハワイ公演を果たしました。毎年、ユネスコ協会連盟では全国大会を行っていますが、今年、二〇一六年の沖縄大会の二日目に、メンバーの中高生たちが歌って踊ってくれました。このプロジェクトの合言葉は「Next Generation Changes the Next」。まさに次世代を担う人たちが、文化や歴史を背景に次世代に伝えていく事例だと感じられます。

続いて、岡山県美作市「英田上山棚田再生プロジェクト」未来へつなぐ棚田8300枚（二〇一三年）を紹介いたします。

上山地区は、江戸時代に原型が築かれた約百ヘクタール、八千三百枚の水田があると言われていました。棚田の生産量は労多くして、平地の二分の一程度とも言われています。かつては、稲刈りの時期にはハゼ干しされた稲穂が山一面の棚田を埋め尽くす景色が見られましたが、限界集落となっていました。

そうした中で、大阪から上山に移住した人たちや上山地区の現地の人たち、そして地域おこし協力隊の方々が、棚田の再生だけではなく、棚田にまつわる文化、歴史も掘り起こして、自分たちの地域を見つめなおす活動をはじめました。それがマスコミなど報道されることによって地元の人たちも参加するようになり、

若い世代の移住者も増えました。農村と都市を結ぶ地域再生モデルとなることをめざしています。

棚田の再生は、地域集落を守るだけでなく、文化の伝承そのものです。これにより、多様な人がつながり、祭りの復活のみならず、棚田での映画祭や、無農薬でお米をつくってブランド米という形で売り出す活動など新しい事業も数多く立ち上がっています。耕運機が入らないため、昔ながらの手法を用いています。が、そこに地元の次世代も参画しています。

次は、和歌山県海南市の「孟子不動谷生物多様性活性化プロジェクト」（二〇〇九年）です。

孟子不動谷は、海南市の奥深いところにある地域です。一九九八年に立ち上げられた「特定非営利活動法人 自然回復を試みる会ビオトープ孟子」では、里山の保全、とくに県のレッドデータブック記載の希少動植物や稲作について、地元の幼稚園から大学生までがそれぞれのレベルや興味関心に合わせた活動を行ってきました。絶滅危惧種になっているトンボなどが多く生息する地域なので、無農薬の田んぼをつくるだけでなく、地域の生物多様性にも注目した活動をしています。幼稚園児も活動に加わっていますし、プロ顔負けの自分の田んぼを持つ中学生がいるなど、多くの次世代が関わっています。常に「百年後の子どもたちに守り伝えること」を意識した活動が展開されており、この活動がきっかけとなり、大学で生物学や自然科学を学んでいる生徒が多数

いるほどです。また毎年「生物多様性フォーラム」を開催するなど、開かれた活動を行っています。

福岡県八女市では「空き町家の保存活動と、町家を支える伝統工法の継承を行うプロジェクト」（二〇〇九年）が行われています。一五八七年頃、領主・田中吉政によって整備された城下町は、防火の備えから「居蔵」と呼ばれる瓦屋根の土蔵造りが特徴で、この妻入り居蔵の町並みは「重要伝統的建造物群保存地区」に認定されています。しかし、少子高齢化にともなう町全体の空洞化により、空き家も増え、現在では町家を支える伝統的な建築技術の継承も困難な状況です。空き家となった町家を住居やカフェ、ギャラリー等に活用し、市民へのワークショップや子どもたちの体験学習などを通じて、町家を維持していくための伝統技術の継承を行っています。

二〇一四年、八百九十六の自治体が、消滅可能性都市として注目を浴びましたが、日本全国の市町村にとって、これは深刻な問題です。この問題の解決には、ESD（Education for Sustainable Development）：持続可能な開発のための教育）を含めて、地域の歴史・文化や地域の自然の再発見、世代を超えた縦断的な連携、職業や立場をこえた横断的な連携が鍵なのではないでしょうか。現在、プロジェクト未来遺産は全国で五十七ありますが、その成功事例からも、さまざまな鍵が見えてくるように思います。

■おわりに

今後の課題として、次世代を巻き込んだ行動の変革が重要になってくるのではないのでしょうか。これは、次世代に一任するという意味ではなく、われわれ大人も一人ひとりが、気づいたことに対して行動を起こしていくという意味です。たとえ小さな一歩であったとしても、まわりの人とながらより良い方向に変えていくとする努力が重要ではないかと思うのです。そのことによつて、多くの若者が「この町に住みたい」、「住み続けたい」と思えるような町がつくられていくのではないのでしょうか。それは豊島区に限らず、全国各地に言えることだと思います。

先月、法明寺のご住職である近江正典さんや、「としま案内人 雑司ヶ谷」代表の小池陸子さんに、雑司が谷のことを伺う機会をいただきました。実を言うと、豊島区や雑司が谷のことを知る機会をいただいたのはそれが初めてのことでした。印象深かったのは、としまユネスコ協会の方々をはじめとして、豊島区の未来を考えている方々が、非常に活気にあふれていることです。やはり中心となる人たちが、元気に楽しく活動していることが重要だと感じ、心からこちらのプロジェクトを応援したいと思いました。ご清聴、どうもありがとうございました。

（かわかみ・ちはる 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟事務局長）